
チートな俺と異世界物語

月影ミケ乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな俺と異世界物語

【Nコード】

N5819W

【作者名】

月影ミケ乱

【あらすじ】

苛められ死に掛けたところを女神に助けられ、

女神に異世界に飛ばされしかも若返ってしまった主人公。

魔法と剣の世界で暴れまわる、チートな力と持ち前の黒い心で正義になれるか？

処女作品ですから色々と至らないところがありますがよろしくです。

00:プロローグ(前書き)

処女作品を読んでくれてありがとうございます、今後ともよろしくです。

00:プロローグ

プロローグ

不公平な世界、

どの世界にでも言える事は同じである

中世期なら貴族と平民、江戸時代なら武士と町民、
今は政治家とかの官僚と一般市民。

どんな所でも絶対にある不公平、格差、

弱肉強食な世界では強者はいつもいい目を見る、
弱いものはいつも罵られ、苛められ、傷ついていく。

100人いたら2〜3人位弱者になっってしまう、

そう言う俺もその一人だ、殴られ苛められる。

しかし屈服した事は一度もない。

周りが見て見ぬフリをしていようと俺は屈服することはない。
だけど手出しもしないから苛めグループも調子にのる。

今日も虐めグループのやつらが屋上に呼び出されていた。

正確には屋上にいた俺をやつらが見つけたのだ、

しかも取巻きを2〜3人連れて、全員同じクラスのやつらだ。
後二人ほど居ないのは多分出入り口で見張ってるのだろう。

3人は俺とリーダーを取り囲むようにたっている、

俺は鉄網フェンスを背にそいつとむかいあっているのだ。

「うらぁ！」

グループのリーダーのやつが僕の腹を蹴り上げる、

「ぐっ！！」

胃の中のものが出そうになるがダメージはない。

昔から続く虐めで培った経験がダメージになる前に後ろに軽く飛んでしまう。

だがこの時俺はこれをするべきではなかったと後悔する事になる。
後ろにあるはずの鉄網がいきなりはずれた、
老朽化でボロボロに鉄網ごと俺は空中へと吸い込まれていく。
直感でヤバイ事になったと思った、落ちてるいくのを感じてしまっ
てる。

一瞬目に入るあいつらの驚いた顔、そして焦ってる顔。
たぶん後は後悔するだろう、俺が死んでも。

ただ親が悲しむ事はあまりいい気分じゃない。
だから頭を抱えるようにして目をつぶる痛みに耐えるために。
そして真っ暗な世界が俺を包む。

* - * - * - * - *

目を開くと真っ白な天井を見ている、照明も継ぎ目もない真っさら
な天井

「・・・知らない天井だ」

ゆっくりと体を起こすとその真っ白で真っさらなのは天井だけでは
なく、

壁も、床もぜんぶが真っさらで真っ白な部屋だった

まさかとは思うけどこの後の展開が思っているとおりなら。

「目覚めたようね？気分悪いとかないかしら？」

突然後ろから声をかけられる振り向いてみると誰も居ない、気のせ
い？

「どこ見てるの下よ下、目線を下にしなさい。」

また声がして今度はいわれたとおりに下をみる、

そこには一人の少女がいた、しかもかなり美少女だった。

印象的なのはシルク見たいな長い金髪と金色の瞳、

服装はギリシャ神話に出てくるアテナの格好に似ている。

ただスカートの所が短くひざ上のあたりで開くようにしてある。

「か・・・かわいい」

つい本音が出てしまい、見とれているとその美少女も顔を赤くしてそっぽ向いた。

「ほ・・・本当な事言わないでよ」

かなり照れているのがわかる、ツンデレってやつかな？

「そんな事より最初に言っておく事があったは」

美少女はびしつと僕に指をさして言う、顔はまだ真っ赤だけど。

「うるさい、ちゃんと聞く」

「ごめんなさい・・・って心に思った事までつつこむんかい！」

つつつこんでしまったがふつと違和感を感じた。

「ってなんで心が読めるの？ってかここどこ？」

「ここは虚無界、簡単言うとすべての世界の狭間よ」

「虚無界、でもここは部屋みたいだが？それに俺は落ちたはずでは？」

「ここではイメージした事を実現するようになってる、

この部屋は私が固定して作った擬似的なものよ、それにあなたは死んではないし」

「しんでないって・・・」

「正確にはあなたの世界ではあなたは死んだ事になってる、ちゃんと遺体もあるし

それにあのリーダーの子も捕まったわ、あなたを殺した罪で」

それって神様のご都合主義のたまものですか？って言いたくなる、この展開からして俺は違う世界に飛ばされるだろうな・・・

「そうね、理解が早いのはいいわ、そういえばあなたの名前知らなかったわ、

いい子いないかな」って思ってたときに丁度あなたが死にかけたたからね」

「しかも運で決められたのかい！・・・まゝいいか、俺は神崎聖真だ」

「うむ、ではセーマ、あなたに異世界に行ってもらおうよ」

予想通りの展開にため息する聖真、もしかして何もなしのままだった

たら僕そこで死ぬぞって顔して

「言いたいことはわかった、それじゃ〜12個くらい能力をあげよう」

「12個の能力、どんなでもいいのか？」

真剣に見つめると女神さまは自信まんまんに腰に手をあててから

「うむ、どんなでもOKだよ」

「なら身体魔力強化向上、魔術とスキル全種取得、創造魔法と錬金錬丹術真理開放つきで、

ついでにアニメ漫画ゲームの魔法と技もマスタークラスで使えて、ついでに瞬間回復、

後は概念付与と無限の知識かな。」

少しあきれた顔する美少女女神、だが面白そうに笑いだす。

「あなた面白いわね、しかもチートみたいな能力を選ぶなんて、くすっ」

「それぐらいあればなんとかなるだろうって思ったただだよ」

「後4つくらい残ってるけど？」

「今は考えたついたやつだから後でくれるか？」

「いいわ、その能力あげる、それとこれももっていきなさい。」

指を僕の左腕に向けてと左腕が光る、

粒子が固まるよう腕に赤い宝石が付いた細身の腕輪がつけられた、

「それはあなたの世界で言うステータスとか知識のを検索させるやつよ、

あなたが見てた本やらアニメとかに出てくる空中に浮ぶ画面みたいな感じよ」

なるほどある意味便利ツールみたいなのか、

「それからそれは道具を入れておけるから便利よ、ストックレベルも無限だから

ある意味某猫型ロボットのポケットみたいになるわ。」

「便利ツールって所か、いいものだと思うし、後はその異世界の事に関してだな。」

「うむ、それはあつちにいる者にも聞いてくれる、私よりも事情もわかるだろうしな」

「そうか、あゝそうだ、質問はこの腕輪を通してできるだろ？」

「そうだな、基本はそれが一番じゃろうて、念波でメールみたいなのできる」

「メールの意味を知ってるのが驚きだ」

「簡単な事だよ、あなたの世界の事情を見ればいいんだし、あと何か追加したい機能は

あなたのイメージで構成されるから気兼ねに使ってね」

イメージで作るってなんとなく電話にアプリを入れる感じだな、

「ってなわけで準備できたみたいだし、いってらっしゃい」

「っこりと可愛い笑顔をして手をふる、かなりいやな予感がした。

まさか・・・！！

思った瞬間になもう足元の空間がなくなっていた、一瞬の浮遊感そして落下

「また落ちるのかあああああゝゝゝ・・・」

「道中幸あらんことを。」

一気に闇の中へと吸い込まれていく。

つづく

00：プロローグ（後書き）

はじめして、月影ミケ乱です

さて始めました「チートな俺と異世界物語」

基本はファクションとしたいですがいろいろと取り込む（魔法や技）
予定です

ちなみに主人公はある意味黒いです、もしかすると普通の主人公より黒いかもw

一応色々やっていきますのでどうぞよろしく願います。

PS：

感想や指摘がありましたら連絡ください。

01：異世界と力

01：異世界と力

「ああああっ・・・って!!」

思いつきり尻餅ついてしまい、ぜったい女神っ娘を許さないと誓った。

すこし落ち着きが戻ると回りの景色を見て、ここが森の中つてのに気がついた。

しかもかなり大きい、俺がいた世界の木より大きいのでは？って思うくらい大きい。

まるで自分の背が縮んだような気もする、目線が小中学生のころくらいだ。

「かなり奥地だな、人の気配とかもないしまわりに見えるのも木々だけだ。」

ゆっくりと立ち上がると左右前後を見回す、木々の成長とか地面の草の感じが森の奥と同じである。

とにかくまずは自分の状態をみてみるか、左腕の腕輪に念じてみると目の前にステータスウィンドが広がる

基本のステータスを見るとすべてがSクラスになってた、必要のデータを見てみるとあの女神より弱いようだ。

しかしドラゴン（上級竜神クラス）と同じ位の強さらしい、規格外って感じた。

簡単にまとめると

名前：神崎聖真

かみさきせいま

種族：異世界の人間

所属：女神の使徒

身体能力：S

魔力容量：S
物理攻撃：S
物理防御：S
魔力攻撃：S
魔力防御：S
魔法属性：火・水・風・土・氷・雷・光・闇・空間・創造 全種S
特殊能力：神の落とし物（？）、スキルマスター、マジックマスター、スキルクリエイター、
マジッククリエイター、クラフトマスター・・・etc
特殊加護：女神の祝福、精霊の加護

つと出てる。

さすがに強さは半端ない。

普通の冒険者でもいいところでCからBくらいらしい、規格外なのはいいといてスキルの欄を見てみるとこれまたいろいろなスキル魔法があった。

「全部で800くらいかな、固有スキルもあるな。」

魔法欄は基本的なのを入れると500だが、その下に特別魔法は空白だ。

どうやら俺が創造でできる魔法の閲覧できるようにしているらしい、だから空欄なのかって思う。

装備は学生服と靴、あと見定め腕輪と書かれてる、この腕はの名前がそうらしいな。

あとはおいおいと知るためにレンジャースキルと何個かピックアップする、ちなみにスキルはマスタークラスになってる。

『気配感知』『足跡トレース』『方向感知』をつかっていく、森では迷子になりやすいという知識からだ。

「それと・・・」

頭の中に刀をイメージする、鋭く切れる上に強いイメージを付け足す。

壊れにくいようにそれでいて繊細にイメージすると手を合わせて地面につける、

科学変化を起こすときにおきる放電をともない一振りの刀ができてくる。

握りも鐔も鞘もある刀はイメージどおりの形をしている。

「ふむ、錬金もできたな、もしかするとあの金属もできるかもな。」
今度はある金属をイメージしながら創造魔法を使う、繊維上に組拳
げていきついでに色も黒くしてみた。

簡単なコートみたいな服を作りあげていく、普通の布より軽くそれでいて強靱な素材に仕上げる。

「なるほど、一応できたなミスリルのコートって感じた、これなら一応の攻撃を守れるだろうな。」

一応羽織ってから刀を腰に回すとゆっくりと見回す、今ので近づいてくる気配もないな。

数秒考えてからゆっくりと腰を沈めて一気に力を解放すると高く飛び上がる、一気に木々をとびあがる。

スピードもさることながら高さもすごい、これでもまだ3割くらいの力だ、軽く5〜6階くらいの高さまであがるとすばやく見回す。
ものすごい勢いで落ちていくと足を曲げて衝撃を和らげたが、衝撃はかなり軽かった。

規格外だからやれることか、もしこれで落ちたら普通は死ぬだろうな。

それとさっき見えた限り自分の右側の方に煙が見えた、あっちなら人がいるのだってわかった

「行ってみるか、まゝ何かあるだろう。」
煙が見えた場所へと向かうのだった。

あと300mくらいになって走るのをやめた、途中角の生えたウサギみたいな動物を4羽ほど遭遇したのだがすべて倒しておいた。
今はそのウサギも紐をとおして背負っている、一応血抜きをしてか

ら軽く水で洗ってある。

あとすこしって言う時にいきなり爆発音が聞こえてきた、ぱつと足を落として周りを見回す。

「なんだ？いきなり？」

音の感じからして今向かってるところだ、何かトラブルか？

スキルで『遠目索敵』を発動した、これで遠くにあるものが見えるようになる。

「戦っているみたいだな、人と魔物ってところか、幾分か押されている感じだな。」

遠目索敵のおかげで今の距離からでもかなりはつきりと見とれるようになった、

「どうも商人のギヤラバンって所か、助けておいて一応近くの町まで連れて行ってもらうか。」

そう思うと踏み出していた、ここから歩いてても2〜30分前後だ、だがかなり早く動いたため数十秒でついた。

3台の水口つき馬車に数人の商人がいて、戦ってる護衛の雇われたやつだろう、全員で14人前後。

対して魔物は見た目がオークとゴブリンの複合部隊みたいな感じだ、ただ数が多い。

いきなり現れた俺にびっくりした商人に持ってたウサギみたいなやつを渡すと。

「助太刀する、これもっておいてくれ。」

素早く刀を抜刀すると目の前のゴブリンを切り裂く、護衛部隊の横に並ぶと返す刀でもう一匹を切る。

「不利みたいだから手助けするぞ。」

「すまん、たすかる。」

その部隊の隊長みたいなやつがちらつと俺をみるとふたたび戦いに集中した。

この部隊はほぼ守るように戦う以外は攻撃はしない、追い払うことが目的らしく撃って出る事をしない。

しかしこのゴブリンとオークの部隊はある意味統率の取れた動きをする、隊を仕切っている奴がいるのだらうと踏んでいた。

「なるほど、こいつら上がいるか・・・」

オークの2匹を斬り倒すと敵部隊の後ろ側を見つめる、2匹ほどほかの魔物に激を飛ばしてる。

「あれがやつらの頭だな、なら・・・」

一度刀を鞘に戻すと一気に5匹を飛ばすように切り裂く、そして前進した。

「敵の司令官をつぶしてきます、それまで耐えてください！」

そういうと同時に一気に相手の奥へ突き進む、目の前にいる敵はまるで紙切れみたいに飛んでいく。

刀で切るだけではなく全身を使って吹っ飛ばす、合気道の極意の触れるだけで相手を吹っ飛ばす感じで。

ただし力が半端ないため敵すべてが高く上げられたり、仲間を巻き添えにしながら飛んでいく

刀は相手の武器を牽制したり流したりする、護衛部隊の人たちもオークとゴブリンも啞然としてる。

頭の2匹の前に来た時には2匹以外は吹っ飛ばされている、2匹はオークロードとゴブリンマジシャンだ

オークたちより二周りほど大きいオークで手にはロングソードを持っている、

ゴブリンマジシャンは羽とかで飾られた被り物と杖をもっていた。

「お前たちを倒せばあとは烏合の衆、覚悟してもらう。」

俺は刀を担いで構えをとる、オークロードはロングソードを振り上げ雄たけびを上げて突進してくる。

走るタイミングを見て一気に目の前まで詰め寄る、『縮地』と呼ばれる移動方法。

そして相手の懐をすり抜けるようにして相手を切る、我流：『灯籠流し』。

相手の攻撃に合わせて攻撃の隙間をすり抜ける技、威力は絶大で心

臓と脊髄をきれいに切り裂く。

そのまま相手の後ろに回り込み一閃で首を切り裂く、首が落ちると同時に臭い血液が噴出する。

その前に飛び上がり近くの木を蹴って一気にゴブリンマジシャンを上から切り裂く、

『龍槌閃』、相手の上から体重を乗せた一閃し真つ二つにする。

一瞬、まさにその言葉が似合うほどに決着がついた。

頭がやられたのを知った魔物たちは唖然となり気づいたら森へと蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

刀についた血を紙で拭き取ると鞘へと収める、護衛部隊から安堵と歓喜の聲が上がる。

聖真はオークの牙とロングソードを、ゴブリンマジシャンからは被り物と杖を取って戻る。

一応後で必要になると思ってコートの中に入れるふりをして腕輪に収納した。

そのままゆっくりと戻ると護衛部隊の隊長が歩いてきて、

「たすかった、ありがとう！」

つと握手を求めてくる、俺は一応礼儀としてその握手をしてから。

「いや、こつちも多分今からたすけてもらうことになるさ。」

つと言つてにつこりと微笑みを浮かべてる、そして目的をこつちから告げる。

「すまない、道に迷ったので町まで連れていってもらってもかまわないか？」

俺の申し出に唖然とする隊長さんだった。

続く

01：異世界と力（後書き）

どうもミケ乱です、

さて今回はステータスと戦闘をやってみました。

結構表現が難しいです、やっぱり国語すこし勉強しないとイケないかなw

ちなみに我流『灯籠流し』はある意味某漫画の「流水制空圏」と同じ感じです。

体格差を考慮しているので脇をすり抜ける感じでw

ちなみにスキルがいいのがありましたら教えてください、ご感想まっています。

02: キャラバンと勉強（前書き）

ちよつと時間がかかりますがよろしくです。

02：キャラバンと勉強

02：キャラバンと勉強

夜明けを見つめながらゆっくりと体を伸ばす、あの戦闘から3日過ぎた。

あの後商人たちが俺が倒したゴブリンたちの素材を買い取ってくれ、その上あの時とったウサギモドキは夜の宴会の主賓になった。

どうもあのウサギモドキこと「ランブラビット」はめったに取れない食材らしく、街でもかなり重宝されるらしい。

3匹は食べて1匹は買い取ってくれた、金貨4枚ほどで。

一応俺が倒したゴブリン分と合わせて今あるのが金貨21枚と銀貨60枚をもらった、

街に向かうこのことで街まで案内と護衛をすることで同意した、一応給金として金貨1銀貨80枚をもらう予定だ。

ちなみにこの通貨は銅貨、銀貨、金貨、白銀貨、白金貨となっている、銅貨1枚につき100円の計算で、

100枚づつであがつていく、つまり俺が持つてる金額で言えば21万6千円をもらったものと同じだ。

ちなみに物価とかは低いほうだということでかなり高額にももらったほうだ。

「おはようさん、よく眠れたか？」

後ろから声をかけられ振り向くと護衛隊長のゼンさんがいた、ゼン・カーデー、30〜40代の男性で格好からしても戦士とレンジャーの間って感じがした。

ギルドクラスAランクだと言う、なかなかナイスミドルって感じ

だ。

彼以外は大体がランクからすればC前後だという、Cランクでもそれなりの一人前の冒険者たちらしい。

ギルドランクは最初はF-から始まりF、F+、E-、E、E+、D-、D、D+、C-、C、C+、B-、B、B+、Aとなる。

ちなみにその上もあつてAからはA、A A、A A A、S、S S、S S、Gとなつてゐる、

Sクラスは化け物なみに強いって言われてゐるらしい、Gはレジエンドクラスになりこの国に一人しかいないらしい。

「おかげさまで、まゝなれてしまつたつて言うのもありますが」

苦笑交じりに言った、ゼニンさんもうなづいてから。

「朝食ができてますから食べてきたらどうだ？それと今日の夕方には街につくから」

「了解です、ではいただいてきます」

そういつてゆつくりと体をのぼしつつ歩きだす、ゼニンさんはどうやら商人の人と話をしにいくみたいだ。

ちなみに俺のことは補充要員みたいな感じにいる、一応ほかの部隊員たちともある程度話してる。

魔法のこともいろいろと聞いてみた、こっちの魔法はほとんどが呪文を口ずさむ詠唱呪文がほとんどらしい。

魔方阵も使うがほとんどが杖や宝石に刻む程度らしい、固定魔法とも言われてる。

魔方阵の場合はすぐに使えるために戦闘の時によく使つらしいけど消費が激しいため大変らしい。

ちなみに属性全部使える俺は一応見せてるのは光と雷だけだ、まだなれないことが多いので一応二つに絞った。

「セーマ君こつちだよ」

俺を呼ぶ人は魔法使いのファインさん、属性では炎と風を使う人で護衛部隊の増援で一緒に旅をしてる人だ。

「ファインさん、今日はなにですか？」

「今日は干し肉と香草のスープとパンだよ」

スープとパンの入った皿を渡してきた、パンも黒パンと言ってあまりいいパンではなく硬くて不味い乾パンだ。

スープに漬しながら食べるとそれなりに食べることができる、携帯食とはそんなものだろう。

ファインさんが作るスープは香草がうまく使われて味はいい方だ、ちなみにほかの人が作ったやつはかなり不味い。

「ありがとうございます、いただきます」

手を合わせてからゆっくりと食べはじめ、香草の味が程よく体にいきわたる感じがした。

「おいしい、さすがファインさん」

「ありがとう、今日も一応魔法のことを聞くんではない？」

「はい、お願いします」

俺に魔力があるのを見抜いてからなんとなく張り切ってる様子だ、

ちなみに俺の動きも魔力が関係してるとのこと。
強化魔法みたいなのが自然とかかっているのかもな、半分はスキルも入ってるけど。

「それにしても若い君にこれだけの才能とかあるとすごいことだよ、絶対帝都魔法学校にいくといいよ」

「でも金かかるのでは？」

「そうでもないよ、君くらいの才能ならすぐにでも学校でトップも取れるかもね」

ファインさんのお墨付きがつくほど飲み込みが早いのがある、ちなみにスキルで『最速経験』ってのがある。

このスキルでかなり早く覚えたりするらしいが、ちなみになんで学校かって言うと俺の体格がそうなってるからである。

なぜか若がえってる、年齢的に12から14の間のところで身長も160前後になってる。

いってみれば小学校高等部みたいな感じだ、どうやらあの女神の差し金だろうな。

そういうことで一応ギルドより先に学園へと通うことにしたのだ、大体2年で課程を終えれば卒業できることなのでいく事にした。

こっちのことを知るにはいい機会だろう、ファインさんも一応紹介してくれるらしいから。

学園に入れば自動的にギルドに所属することができる、ある意味一石二鳥なことだ。

「じゃそうさま」

「ん、それじゃー今日は魔力による強化もしてみましようか？」

「お願いします」

頭を下げて魔法の講座を受けていた、使える魔法を限定してから使うから基本をマスターするとできるからな。

強化魔法も無属性の魔法で使えるひとがすくなく地味なのが多い、ただ応用の幅はかなり広い魔法である。

強化の魔法は魔力がある人なら普段から使ってること、ただ冒険者でも数人しか戦闘で使ってなく扱いが難しいらしい。

俺にしてみれば簡単だが一応基礎からしている、今日は武器を強化をすることになっている。

「魔力を纏わせればこんな枝でもナイフみたいに切れるようになるの、わかります？」

「ん、なんとなくがわかった、あとは実際にやってみるしかないな・・・」

木の枝を使って軽く魔力を纏わせる、何回もやっているが力を入れすぎると枝が爆散してしまうのですこしづつやってる。

「いい感じです、そのまま固定させれば消費する量が少なくていいですよ」

もやのように魔力を木の枝にまとわせてるがそれでも拡散してるらしく薄くなっていく、

ならこつちの方でとどめるしかないか、某猟師漫画の応用を使ってみるかな。

点を使い枝に膜を張るようにイメージする、するとさっきまで靄み

たいな魔力がびっしりと枝にまとわりつく。

「すごい・・・そこまできれいにできるのはかなり達人級ですよ！？」

なるほどこれくらいは普通はできないと、まゝ大体わかったからいいけどな。

「そうですか？んじゃゝ筋がいいのかも知れませんか」

俺は魔力供給を止めてから枝を木に投げた、まだ残っていたのか枝がびっしりと木に刺さる半分埋もれるように。

威力としてはそこそこのナイフと同じ位か、それを見て異常なのかファインさんは驚いてる。

「木だけであそこまでささるのってすごいことだわ、もし学園ならトップ間違いなしよ」

「学園でトップってそんなにいいことなの？」

ふっと疑問に思った俺はファインさんを見つめる、彼女もすごく興奮して、

「学園トップなんてなったら言ってみればその学園の生徒会長と同じ位の地位があるわ、

もしギルドにそのままいけば確実にBクラスに入れるし、この国の上級士官にもなれる特典がいっぱいなよ」

ギルドのC＋クラス以上の場合はかなり身分やらがしっかりした人しかねない、

その点学園が認めていればBクラスになるのは簡単らしいが実力がなければならぬ、だから学園もそういう意味でトップとベスト10以外はBクラスへ優遇できないとなっている。

「Cクラスでもかなりの実力がなければならぬから、学園を去る人も多いのよ」

実力主義な世界だから学園でもそういう事があるのだろう、なら成り上がるにはそっちの方がいいかもな、ついでに研究もできそうだな、今の装備もある程度はあるけどそれ以外になにかあるか調べるにもいいし。

「そろそろでるぞー!!」

ゼニンさんが大きい声でみんなに言うつとすぐにテントやらをたどみだす、

俺もファインさんとの講義を終えてから自分のテント（もちろん錬金で作った）しきと隊列の中央左側に向かう、

俺が早いのと牽制ができるのでそういうポジションになっているのだ。

「出発するー!」

前方のゼニンさんが大きい声を発して馬車が動きだした。

つづく

02：キャラバンと勉強（後書き）

ミケ乱「あとがきコーナー！！！」

ミ「今日から始まるあとがきコーナー、司会はもちろん作者という神な私月影ミケ乱と」

聖真「神崎聖真でお送りします」

ミ「それにしてもいきなり主人公がこのコーナーで司会で出るのはどうだろう？」

聖「それはあんたがあまりトークがうまくないからだろ？」

ミ「それはたしかに、そうだが・・・」

聖「それに文力もヘタレな上、頭も悪い、それに顔も悪い」

ミ「・・・お前言いたい放題だな・・・」

聖「俺は黒いんだろ？もつと言ってあげようか？」

ミ「いえ、もういいです」

聖「なら次回を告知しろよ」

ミ「はいはい、次回は03：学園と入学式（1）でよろしく！」

聖「みんな見てくれよ！」

03：学園と入学式（1）（前書き）

今回は分割して書き込むようにします、まゝそんな長くしないつもりです、
ではお楽しみをゝ

03：学園と入学式（1）

03：学園と入学式（1）

目の前に大きな門がある右に剣を携えた騎士みたいな銅像、左に杖を携えた魔術師みたいな銅像、

剣と杖が交差するように門の上でアーチを描いてる、そこは魔法学園エーフリット

今日から俺が通うことになった学園だ。

<一ヶ月前の夕方>

街の前まできた時に商人たちと別れることになる、俺は一応身分所がないため書類とかに記載しないといけないからだ、

ちなみにお金もちやつともらってるのだが一応中で落ち合う予定だ、ファインさんが学園に推薦するって事になったからだ。

「それではここに名前とか記入してそれと武器も一応書いておいてください」

俺を対応してる目の前の騎士が紙を出しながら言う、

ちなみにこっちの言葉の基本は英語に近く学校で習ったのを応用すれば簡単にできた、

ほかにも言葉みたいなのはあるがこれは個別の種族言葉だとわかった、

ちなみに俺の周りにも同じようにしてる人がいるが、全員人間外、簡単に言えば亜人だ、ここで確認できるのはドワーフ、エルフ、リザードマン、モビット、その他獣人族が多数だ。

ここまで多種多様な人種がいる、この世界はある程度の人種は許容

範囲内だという事はファインさんから聞いた、
実際ファインさんたちの護衛部隊にも獣人族が2、3人はいたのだ、
だが俺みたいな黒髪な人間はめずらしいとその人たちも口ずさんで
いた。

「この街の御用はなにか聞いてもよろしいかな？」

目の前の騎士が俺と書類を見ながら言う、すこし怪訝な態度をして
るのは俺みたいなのは初めてらしいと言う感じだ。

「一応学園に入るつもりですけど？」

「そうか、それじゃここに学園入学者と書いておこう」

騎士は手早く書類に書き込みをすると四角い黒い石を俺の目の前に
出して、

「これに手を置いてくれ、いいというまで」

右手を黒い石に乗せると淡い光が出る、魔法石で出来た何かだろう
とわかった、

もしかすると現代である指紋照合みたいなのでは？っておもった時
光がすつと消える、

「これで街に入る登録が出来たぞ、このカードをもっておいでくれ
この街での身分証明書だ」

小さな魔法石をつけたカードをもらった、魔法石を触ると一応俺の
名前と種族それと学園入学者と出てる、
ほかの項目もあるがさっき書いた書類のほとんどが載ってる、

「このカードは一応だがギルド登録とかしたらそのままギルドカードになるからな、
学園なら同じ感じだ、無くしたら新しいのを作るのに金5枚は必要だから気をつけてくれ」

カードを手にしたままゆっくりと門をくぐるとそこは多くの人が行きかう大通りだった、

地球だと渋谷や新宿の駅から出た感じにもてる、人が行きかい通りはかなりの賑わいをみせていた。

「セーマく〜ん〜!」

入り口からすぐにある銅像のところでファインさんが手を振ってる、
以外に恥ずかしいかも。

銅像は二人の騎士と魔法使いの二人が並んでる、なんでもこの街を作った人物らしい、

ちなみに騎士が男で魔法使いが女だ、

「一応学園にいく?それともギルドにいつておく?」

「ギルドがさきかな、あとでいるのよな気がする」

「そうね、私もいればすぐ出来るからね」

二人でそのままギルドへと行く、大通りに面した大きい建物にギルドって大きく書かれていた、

ここのギルドはこの国で3番目に大きいギルドだとファインさんがいつていた、

一応学園があるから半分は学生になってるらしい、

簡単な説明と今持つてるカードに登録するだけだからさして時間がかからなかった。

ちなみにカードの色が変わり白から赤いカードになった。

「以外にあっさりしてるな、でもなんでだ？」

「それはあなたが学園に入るって事がカードに書かれてるからかもね、今の時期は学生になる人が多いのもあるわ」

「なるほど数が多いから簡単にしたって事が、後は学園が判断するって事かな？」

「次は学園ね、明日に筆記テストと1週間の実技テストがあるわ、結構な人数になってるからたぶん最後の3日はテストクエストになるかもね」

「テストクエスト・・・ダンジョンだろうか？」

「テスト用のダンジョンっていうのがあるの、レベルを調べるので行った階層でレベルを測定できるって言われてるわ」

ほかの説明や注意事項をおしえてくれがなら中央までいく、学園は町の中央にあり、街の半分くらいの大きいが学園で、学園を中心に街が形成されたって言われるくらいこの学校はでかい。

外からは学園風景はあまり見えない、かなり高い壁に覆われて見えるの木々の頭あたりくらいだ、

門の前に何人かの人が机に書き込みをしてた、受付をしてる人たちも丁寧に対応してる、

見た目からして同じ年かそこらの人たちがいるという事は学園の生

徒だろう、

「すみません、入学登録はここでいいのですか？」

「はい、ここに名前と年齢と得意なことを書いてください」

なかなかきはき言う子だ、元氣って言うよりきっちりするタイプとみた

「それとギルドカードをお持ちならこちらに見せていただきます」

俺はカードを出すとそれを受け取った子は手元にある宝石がついたボックスにおく、

すると宝石が光だしカードを包みこむ、

カードは色はそのままだが宝石の隣にエンブレムみたいなのが出てくる、

目の前の子の服についてるエンブレムと同じ形だ、多分学園の紋章なんだろう。

「登録は終わりました、明日の8つの鐘の音が聞こえるまでに来てください」

カードを渡されその子はゆっくりと明日のスケジュールを言う、俺は一応必要と思うものだけ確認すると軽く手を挙げて分かれる、俺が終わったあとなぜか後ろから黄色い声がきこえてくるが無視しよう。

「今日はこれくらいかな、あゝ泊まるときそのカード見せれば割引してくれるわ」

フラインさんが連れて行った宿屋はここではそこそこのいい宿屋らしい、しかも学割になって普通銀3枚なのが1枚になった、しかもこここの飯は結構おいしく、冒険者のための健康管理もしっかりしてるようだ、

フラインさんたちのチームもここに泊まってるのでみんなで食べた、今日は肉中心の料理で、

ホー鳥の香草焼き、バーハ肉のこってりスープ、バリ野菜のサラダ、麦パンだった

ホー鳥は地球の鶏に似た鳥で味も似ている、それを甘辛ソースと香草の入ったタレをつけて焼く丸焼きだ、

臭みが強いので香草がそれを消してくれるって感じた、バーハ肉は色からして牛肉を煮込んだシチューって感じた、肉意外の野菜も入ってるがほとんど溶けるほど煮込まれてる、

味もシチューに似てるがバーハ肉は味が独特でちょっと臭みがある、それを気にしなければおいしい料理である、

バリ野菜は簡単に言えば日本のレタスと紫蘇を混ぜたような味だ、さっぱりとした味にぱりぱりとした食感がいい、

ドレッシングもシンプルな油と胡椒と酢と塩の味だけ、でもさっぱりしてるから多く食べれるし箸休めって感じた。

「ごちそうさま、うまかった」

「そうだろうそうだろう、なんせ家の自慢の一つだからな」

目の前にいる気風のいい女性が立ってる、この宿のオーナー兼料理長のアーシャさん

格好は給食のおばさんって格好だが中身がちがった、見た目も若くナイスバディーな人だ、

ちなみに旦那さんと子供もいるが本当にいるのって言うくらいきれない人だ。

「明日から学園でテストするんだろ？準備はいいのか？」

「問題ない、一応何とかなるだろう」

「余裕だね、毎年2、3人はそういう子はいるけど、大抵は貴族とかそういう子が多いのよね」

「俺は貴族でもなんでもない、ただの冒険者だ」

「そうかい、ま、一応貴族もいるから気をつけないよ」

「了解」

軽く手を上げて席を立つとファインさんたちにお休みと行って部屋へと戻った、

疲れていたのだろう体を魔法で汚れとかを落としてから別途に倒れこんだらすぐに眠りについた、

そしてこの街の1日目の終わりを上げた。

つづく

03：学園と入学式（1）（後書き）

ミケ乱「あとがきコーナー！！！」

聖真「今回もぐだぐだといくぞ」

ミ「ぐだぐだつて・・・一応元気にいこうよ」

聖「お前がそれほどのトークができるならちゃんといくぞ」

ミ「そうだけど、まゝいいや」

聖「今回は多種族が多かったな、珍しいやつも多いみたいし」

ミ「そりゃ〜ファンタジーだもん、それくらいしないとね」

聖「どうせあとでなんかの伏線でもいれようとするんだろ？」

ミ「いいじゃん、男が憧れって言えばハーレムだろうに」

聖「まゝいい、それはそうと次回はどうするんだ」

ミ「もちろん試験とクエストなシーンを書くぞ、まゝ試験は簡素だけれどw」

聖「試験と無縁な生活だったからな、試験とか知らないのもわかるが」

ミ「仕方ないさ、俺の育った環境だからw」

聖「仕方ないじゃすまない時もあるがな、それより次回の予告言え」

ミ「はいはい、次回は04：学園と入学式（2）だぞ」

聖「俺の戦いみて惚れるなよ」

ミ「まゝ君にはトラブルが多く待ったてるかもな」

聖「なに!!」

ミ「では次回に〜!」

（速攻に逃げ出す）

聖「まで!ちゃんと説明しろ!!!」

（遅れて後を追う）

????「ふふふっ」

（電柱の後ろに人影が笑みを浮かべて聖真をみていた）

04：学園と入学式（2）（前書き）

ちよつと遅れました、皆さんごめんなさい（――）

04：学園と入学式（2）

04：学園と入学式（2）

桜に似た花が満開になっている、
どうやら幻惑魔法で見せてるらしい、何でもこの創立者が作った魔法だというから驚きだ。

周りを見渡すと人がいっぱいだ、一応保護者同伴はあまりいない、ここに入学試験クエストをパスしたやつらがほとんどだ、

「そつえばここだったなあいつが俺に話しかけてきたのは」

それは試験テストが終わった2日後のことだった、

<27日前>

試験発表の日、この試験は一応最低限の知識とか知ってることが必要という事だ、

ただ日本とかの試験番号ではなく、名前と試験点数が張り出されているのだ、

因みに俺は女神からもらった<知識の泉>で簡単に終わらせた、テストの項目は5つ、数学、歴史、魔法学、地理学、医学の5つ全部書きちゃうのもよかったけど一応目立つことはないように1つずつ間違いを書いた、

点数として450点くらいだろうって計算で、予想どろりに点数は450点だったが、

順位があまりにも上だった、しかもベスト5に入ってるからもつと大変だ、

「あつたな、しかしベスト5とはまたすごい位置だな」

普通は聞こえるか聞こえないかって言うくらい小さい声でいった、すると後ろで黄色い悲鳴が聞こえてくる、

振り向くとどこぞの貴族だろう、服に無駄にきらびやかで赤いドレスを着ている、

取り巻きみたいなのが多い、試験中の後にファンクラブみたいなのがあったのかもな、

俺は面倒と思いその場を立ち去る、すると・・・

「なんですって！私が6位ですって！！！！！！」

かなりキンキンした声が聞こえて振り返るとそこにはさっきの貴族の女がいた、

啞然となつてると取り巻きの一人が俺をみて、

「あの人だわ、先輩に聞いたもの、黒い服に黒い髪の上珍しい名前の人だつて」

そこにいた全員が俺をみつめる、いやな注目だほとんどが好奇心の瞳だったが

一人だけ殺意って言えるほどににらみつけてる、

さっきの貴族娘だ、すぐに俺の前にまで来てまるで品定めするように見つめてる、

「こんな男に私が負けたなんて、あなた名前は？」

俺もすこしかちゃんと来た、いいだろう O H A N A S H I し
てやるよ、

「人の名前を聞く前に自分の名前を言うのが礼儀だともうが、この貴族様は礼儀がなくてないな」

俺は大きい声で言うのと周りの人が一気に緊張を張り巡らせる、まるで恐ろしいものがおきるってわかってるかのように、

「なんですって!!」

「しかもこんなに近いのにキンキンした大きい声を出して、ある意味恥知らずだな」

俺は煽れることはなんでも煽る、俺があつちにいたときのあの野郎にも同じように言葉で攻め立てた、

プライドは持つことは悪いことじゃないがそれを持ちすぎる事は醜態をさらすこともある、

目の前の貴族娘は顔まっかにしてる、まるでゆでた蛸と同じ位にまっただ、

周りの何人かはくすくすつと笑い出した、何人かは貴族を恐れて成り行きを見守っている。

「あんたは自分が正しいとおもっているかもしれないが、人によっては正しくないって事もある、

もしあんたがこの国から出たとしてあんた自身だけで何かできるのか？

ほかの国でもしあんたが今みたいな態度でいたらいつか死ぬことになる、

まゝ死ななくても売り飛ばされて一生慰み者かもな」

「何をおっしゃるのです!!」

「ほかの国じゃなくても魔物にそれが出来るか？あいつらはお前が貴族だからって言ったところでわからないし、ただ殺されるだけだ、パーティー組んだやつはかわいいそうに」

さつきより周りの人間は微妙に俺の味方みたいに見始める、ときおり聞こえる声も『いいぞ』とかだ、ある意味恥の上塗りって感じた、貴族嫌いな人間はどこにでもいる、俺は嫌いというか理解しがたいってただけだ、ついでに相手の行動もつぶしておくか、

「あゝそれともしほかに圧力をかけて俺の邪魔するってんなら徹底的にやってやるから、本気につぶす気で」

くるつと振り向いてにらむように言う自分でも言うのもなんだがすごいドスの聞いた声と共に、

スキル『プレッシャー』、相手に威嚇や殺気をぶつけて行動不能にするスキル、

貴族娘の顔もさつきまで真っ赤なのが一気に血の気が引いた青い顔になってる、

周りにも影響あつたらしく何人かは倒れる人がいた、

「あつ・・・くつ・・・」

まるで言葉すらしゃべれないがまだ気を失ってないって事はそれなりに強いことを示している、

スキルを解くと周りから安堵するため息、目の前の貴族娘も少しよるける、

「セーマ・・・セーマ・カミザキ・・・それが俺の名だ、覚えておけ」

翻すと俺は歩きだす、するとある程度正気を取り戻したのかぎつと俺の方を見つめる目線を感じる、

貴族娘は自分の胸に手をあててから宣言するように言う、

「私、ルーナリー・D・ファブリックが宣言しますわ、あなたを絶対に自分だけの力で屈服させますわ!!」

俺は返事する気はないがまゝ宣言されたのだから軽くをふってその場をさって行く。

S i d e : ルーナリー

無礼な男、たしかセーマとか言っていましたわ、

その男が手をふってから去る背中を見ている、睨み付ける瞳にはどこことなく興味を引く、

それにしてもさっきのプレッシャーはなに、まるで歴戦の騎士が身に纏うようなものだわ、

お父様のご友人の千騎士長の威圧力に似てる、何度か手合わせでたまにいい攻撃ができるとそういう事があった、

あの時本能で後ろに飛んだことでよけることできたが、彼の威圧力はそれをさらに上だった、

「セーマ・・・覚えておきますわ」

このあと3日間の準備期間がある、そして4日間の基礎体力テストと最後の3日間のダンジョンクエストがある、

この最後のクエストは言ってみればクラスを決める大事な日、クリアした階層によってレベルがことなり、

そしてこの階層ひとつひとつがギルドランクになるというのもある、過去最高のレベルはC -、

それ以上は本職のベテランくらいしかいけないからだ、学生でもC

- は1000人に一人か二人くらいしかない、

今年は粒ぞろいといわれるほど多いらしいが私は一応訓練もつんできた、ギルドもCランクくらいの事は全部こなしている、

だから学園の初期レベル記録を更新させるつもりでいる。

「あの男をぜつたいにギャフンって言わせてみせますわ!」

興味を引くがそれ以上にゆるせないので私はあの男に負けないって誓う。

side out

side???

二人の様子を木々の陰から覗いてる二人がいた、

こんなに話題たっぷりなイベントになるとは思ってもなかったのか片方の人はくすくす笑っていた、

「あの子面白いわ、確かファインさんが連れてきた子だったわね」

「ええ、ですがまさかファンブリック公に喧嘩売るとは肝が冷えます」

「いいんじゃない? 私が言うのもなんだけど貴族ってどうも凝り固

まっただの多いから」

「それはそうですが・・・」

「今年は粒ぞろいだし、かなり期待できるわね」

遠くで叫んでるルーナリーをみてまた可笑しそうに笑っている。

side out

「貴族の子に喧嘩吹っかけたですって!？」

食事をしながら合格ついでに今日あったことを話してる、

ここは宿屋の食堂、目の前にはここのおかみさんのアーシャさんがいた、

目の前で驚き半分飽きれ半分って顔をして俺をみてる、

俺はもくもくと今日の夕飯をたべてる、

ポポ肉のから揚げと刻み野菜、野菜スープに輪切りにしたフランスパンみたいなパン、

普通にもぐもぐしてるのをみてアーシャさんはため息をつく、

「あんた、ここに迷惑とかかけないでくれよ」

「あゝ大丈夫です、ちゃんと脅しもおきましたから」

驚愕した顔を向けるがもう呆れた顔になって、

「まゝほどぼにしなよ、試験は死なないけどトラウマになるやつがいるから」

「あゝいゝ」

その日はそれだけ言うつと早々に寝た、

3日間の準備期間で俺は一応武器とかを練成、あと金をためるために鋼の塊を売ったり、

ギルド依頼をしていた、ギルドではすぐにいい実力だったのか1日2つの以来をこなして、

すぐにF - までランクがあがった、そして最初の3日間の基礎体力テストもそこそこのレベルを叩き出してた、

レベル的にはB前後の実力でやっていた、あのルーナリーはCレベルだとわかったのはあとのことだった

そして最後のテストダンジョンクエストの日が明日だった。

つづく

04：学園と入学式（2）（後書き）

ミケ乱「あとがきコーナー！！！！！」

ミ「さーはじまりましたあとがきコーナー、司会は作者の月影ミケ乱と」

聖真「主人公の神崎聖真だ！」

ミ「さて今日はゲストを連れてきてるよ」

聖「誰でもいいけど、あまり崩すなよ」

ミ「そんな事しない、ってなわけで今回のゲスト：フラインさんです」

フライン「こんにちわ、みなさん」

聖「フラインさんが、まー一番最初に出た女キャラだからな」

フ「私がヒロインよ！」

ミ「それはない、出たとしてもちよい役だけだ」

フ「えゝゝそれはないでしょ！！！」

聖「ってか俺はあまり気にしてなかったぞ」

フ「セーマ君ひどい！」

ミ「一応ちょい見せキャラだからな」

フ「えゝだしてよゝ!!」

ミ「それは無理、俺的にはもう終わったキャラだ!」

フ「ひどい!(しくしく)」

ミ「さて次回の話にするか、今回は05:学園と入学式(3)」

聖「ダンジョンを攻略、そしてあの女が」

フ「あの女ってだれよ!!」

ミ「見てのお楽しみ、それではまた次回」

聖「俺は善意はない!」

フ「私は不幸だよ!!!」

05：学園と入学式（3）（前書き）

遅れてすみません、書き時間が少なくて（・・・）

あとPV9、558アクセス、ユニーク2、467人になりました、

なんかめっちゃありがとうございますm（――）m

では続きをどうぞ～

05：学園と入学式（3）

05：学園と入学式（3）

<20日前>

試験ダンジョンクエスト

全体の10km×10km、階層数9階になるかなり大きな地下施設、

魔法学園が設立当初から作られた最大規模の施設、冒険者を育てる目的に作られたとか、

階層はレベルに合わせてFからAランクまでの各階層をしてる、設立した当時はあまりにも大変なためにチャレンジしたのもEレベル以降下の階層にいけないでいた、

ここ10年ばかりでレベルがあがってきたのかCレベルまではいけるようになる、

しかしそれもほんの一握り、相当訓練した者以外はやはりEレベル止まりらしい、

初日は地下一階をつかった演習だった、基本知識、注意事項、そして勝利条件なものだ、

基本この地下には本物の魔物はいない、ほとんどが質量式幻影魔法道具だ、

人が触れられる事が出来るのもので一定のダメージを与えないと幻影は消えないというものだ、

それが9階全部あるというからかなりの量だが使う魔法量は低く、3人もいれば一つの階層は賄える、

取得するのは経験値じゃないが手渡されたクリスタルにポイント制になる、これがデータとなってクラス分けになる。

二日目は点数の低いものが大量に入る、ある意味振るいにかけている、

たいていの場合はEクラスで止まるけどたまにこっちのほうで力出すやつがいてDクラスまで行くことが多々ある、

金持ちのやつが半分、実力半分のことが多く、前者の場合は総合的にみてD・クラスに入る事ことになる、

後者の場合はD＋クラスになる、平均になればなるほど大抵はEかDの間らしい。

さて三日目は俺たち点数が上級者の人たちだ、ちなみにテストと体力テストで上位の人間だけだ、

俺をいれてほしい50人くらいしかない、後は昨日のうちに終わったらしい、

ちなみに今年の上位はかなりの曲者がおおかったと言うのを昨日のうちに試験管の人に聞いていた、

「さて、今日から二日間このダンジョンに入ってもらいます、皆さんが入ったあと戦闘で致命傷と思われる怪我、

また最終日に午後7つの鐘がなったら終わりますので、次の日に総合点数クラスが決まります、

あと注意事項ですが、もし外部の協力者がいる人は先に登録してください、

ほかにも学生同士のパーティーの場合は登録することはありませんので」

受験者に説明してる人はこの学校の先生らしい、はきはきした感じなちよつと生真面目タイプって感じの人だ、

説明が終わると登録のために長机が並んでるところへと移動となった、

ここでは名前と受験ナンバー、それとダンジョンでの行動を把握す

る腕輪をつける、

この腕輪はダンジョンの場所確定、ライフゲージ、ポイント収集、緊急脱出用の魔法がある、
ある意味考えられたアイテムってところだろう、普通に安心して経験をつめると言うことだ。

「さて準備するか、今日はちょっと本気モードで」

今日のために装備を充実させた、ミスリルのコートや刀<山鉄>以外以外にも殴り用のナック籠手、レッグガード、
あと投げナイフホルスター付、あと山鉄だけではと思ってもう一本刀を作る、

魔法刀<雷炎>、呼んで字のごとく、雷と炎の属性を付加した刀、
他のは錬金で作ったが雷炎は創造魔法を使ったやつだ、だから付加することが簡単だった、
そしてあるものと一緒に作っておいた、創造魔法でここまでやればすごいことだと思った。

|| * || * || * || * ||

さて俺は今ダンジョンの中だ、周りでは悲鳴やら剣戟音やら爆発音やら色々と聞こえてくる、

ちなみに今いるのはDクラスの階層だ、ここら辺は比較的簡単に出てた、

敵もアタックかけなければ基本的スルーできる、どうしても思いつき意外はほとんどは戦わなくていいからだ、

ちなみに後ろで苦戦してるひとたちもそれなりにいるけど、俺は基本的2〜3撃当てると目の前で消えていく、

わかった事は的確に当てるとすぐに消える、たとえば人で言う心臓のところつくとか首を切るとかそういう感じのことだ。

「さて、そろそろ下の階に行ってみるか、どうせここだとあまりいいポイントにならないし」

地下に続く階段がある部屋に入るとすぐにエンカウントする、ホブゴブリンが3匹、

この前みたゴブリンロードよりすこし小さい感じでもってるのも銅の剣みたいな感じだ、

普通にDクラスでも倒すときは2匹くらいだ、それも他のゴブリンがいる状態でだ、

多分多く出来ない分を3匹にしたのだろう、3匹はいきなり襲ってきた、

正面に1匹、左右に1匹ずつ同時攻撃してきた、

俺は目の前のホブゴブリンにむかっていく、左右は邪魔するように左右から攻撃しようとするが、

次の瞬間俺は軽く飛ぶ、目の前のホブゴブリンは唐竹切りでこようとしてるのも確認済みだ、

その斬撃を刀で流すと飛んで落ちる勢いを利用してそのホブゴブリンを切り裂いた、

すぐに粒子になって消えたと思うと右腕の腕輪にあつまる、これがポイントを取得することだ、

降り立つと後ろから他のホブゴブリンが襲い掛かる、そのまま足払いをしてホブゴブリンたちを倒す、

いきなりだったのか2匹のホブゴブリンは倒れると同時に立ち上がると左手に魔力を集め圧縮する、

野球ボールくらいの大きさの魔力球をだして、ホブゴブリンに向ける、

「アクセル・シュート！」

あの魔王な魔法少女の魔法球を使う、無属性の魔法だから簡単に出来る、

二つの球はかなり速い速度で撃ち出されてホブゴブリンの頭を撃ち抜く、

すぐに光の粒子になると腕輪に収まるとすぐに移動する、ここにも面倒だからだ、

しかしその光景を見ていたものがいたのだ。

??? side

私は夢を見ているのだろうか、目の前でおきたことが信じられないでいる、

ホブゴブリンがまるで子供扱いだ、Cクラスの冒険者でも3匹を相手にするものかなり難しいからだ、

大抵2人で1匹を担当することが多い、だからどうしてもパーティーを組むことで倒すことが多い、

でも今みたのは一人で3匹を相手にしても臆することなく、それで確実に仕留めてるのがすごい事だ、

下手するとレベルだけでもかなり高い人かもしれない、最低でもAA―Sクラスかも知れない、

でもあの人の持つてるカードは赤色、Fクラスだってわかってしまう、

でもさっきの戦い方はどう見ても上級の戦いかた、もし今度みつけたら絶対に名前を聞こう、

そういえば筆記の発表の時の事件も聞いたけどそのとき寝坊してみれなかったな、

知ってる人はなぜか怖がっていたみたいだし、どんな人かな、

さっきの人だったりして、そんな考えをめぐらせつつ彼女は仲間とホブゴブリンに挑んでいた、

side out

<19日前>

階層のCクラスで仮眠をとって寝ていた、結界魔法と認識阻害魔法を駆使した空間を利用して、

大抵の場合は敵が来ることが多いが魔法でそれらを

Cクラスもそんなにかからなかった、むしろ人がすくなくなってる、俺は最短距離で歩いてるが敵が多かった、敵を切り裂くとか簡単にやっていたが途中から魔法球を使いだす、

敵が出てきたときには魔法球を連射している、数秒でほとんどが頭をぶち抜くかサンドバックみたいになる、

途中外郭が硬いやつがでると<デイベイン・バスター>でほぼ一掃する、

壁に隣接した魔物は壁ごとつぶすみたいな感じで撃ちつける、さすが魔王と呼ばれた魔法少女の砲撃、

ここのボスはゴ布林ロードとホブゴ布林と後衛にマジシャンがいたが一発で終わらせた。

そして今はBクラスの階層だ、ここら辺は動きもいい感じになってきた、

量より質が上がってきてる、1匹でもそれなりの強いやつがいる、下手するとAクラスにいくんじやないかって言うくらい強いやつらがいる、それでも俺は魔法球で倒してる、

ここまでくると人の声もきこえない、大抵はCクラスどまりだろうな、

ここまでくるにも大変だろうし、いたとしてもほとんどが離れてるいるのだろ、

一応ここのボスを倒す勢いで最短距離をいく、角をまがったところ

に一人の少女が魔物と戦っていた、

一人でおもったが、どうやら他の人たちは早々に転送されたいな、

彼女もいい動きはするがそれでも相手が悪い、ビーストデビルと言うタイプだったか、

動物に魔物が憑いて出来る魔物で、Bクラスのモンスターの中ではスピードもかなりもの、

下手するとAクラスにななりうる魔物だ、しかもあの少女はあの時の貴族っ娘だ、

手際がいいがスピードに翻弄されすぎて、1匹ならまだしも2匹となるとほぼジリ貧だ、

見捨てるのも目覚めが悪いから俺は雷炎を引き抜きそしてあの貴族っ娘を援護しにむかう。

つづく

05：学園と入学式（3）（後書き）

ミケ乱「あとがきコーナー！」

聖真「今日はパーソナルの俺様な神崎聖真と」

ミ「小説家兼料理人の月影ミケ乱がお送りします」

聖「おい、それは秘密では？」

ミ「そうか？家では料理作ることが多いからほぼ料理人だ」

聖「そうか・・・あほだな」

ミ「作者に向かってあほなんていうな！・・・馬鹿だけど・・・」

聖「自分で認めるな！」

ミ「いいじゃん、それに今回某魔法少女アニメの技出してみたけど？主人公的にどうだった？」

聖「汎用性が高いからな、使いやすい」

ミ「まゝ君の場合は魔力変換もできるから他の技も出来るしな」

聖「そういえば、向こうから大きなピンク色の魔力が見えるが」

ミ「え？」

どがあああああん！！！！

ミ「ぎゃああああー！！」

聖「本編のあの台詞のせいだな、よかったな」O H A N A S
H I じゃなくて「

ミ「よくね！！不幸だ！！！！」

聖「そんじゃ次回の話だな、次回はやつとこの長い話の終わりになるだろうな」

ミ「うううつ・・・予定ではそうだ、もしかすると長くなるかもだけど」

聖「今回は06：学園と入学式（4）だ」

ミ「あの貴族っ娘に魔の手が・・・」

聖「ほう、それは俺だと？」「ずづづづづづ！！」

ミ「冗談だよ・・・」

聖「お前が言つと冗談に聞こえん！！！！ディバイン・バスター！！！！」

ミ「ぎゃああああ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819w/>

チートな俺と異世界物語

2011年10月6日17時14分発行